

---

# フォーカード？　いや、革命だ！

妖

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フォーカード？ いや、革命だ！

### 【Zコード】

Z2014Y

### 【作者名】

妖

### 【あらすじ】

人間界、魔界、天界……この三界で成り立つ世界

この物語は魔界の家庭教師？が引っかき回したり、引っかき回されたりするお話です

これは更新したとしても順調に行けるかどうかわからぬ大分チャレンジ要素の多い作品となつております

そんなんですが時間があるときにも、ちょっとのぞいていただけたら嬉しいです

オーブニンゲ

豪華な調度品、大きなベッド、どこか禍々しい雰囲気。

セレーナの範囲。

争いが絶えず、凶悪な悪魔が跋扈する闇の世界。

そんな物騒な場所で話は始まる。

「あ～あ・・・・・つまんねえなあ」

しめしめ！

この型がいいの家庭拳銃がいい

「…………なあヒーベル、なんかおもしれえことないか？」

# 「ボケの話聞いてた！？」

よつべの手でかかるか!!

我が道を行くマイペースな男を止めようとするフードを被った男の子。

彼らは一体何者なのだろうか・・・・・・それはまだ謎に包まれている。

少年が腰の辺りに飛びつくと、男は立ち止まり振り向く。

「わかつてゐるつて・・・・・（お前のオヤジにも頼まれてるしな）

「ホントか！？」

つていうか父上も、なんでお前みたいな不真面目なやつを家庭教師につけたんだ?」

「そりゃあ、俺が優秀だからだろ?」

「はいはい・・・・・でお前父上と何処で知り合つたんだ?」

ハゴスと出会った場所か？

あゝ・・・・・何處だつたかねえ

だから父上の名前を呼び捨てにするな」と

その気になればお前なんか小指一本で殺せるんだから氣をつけろよ

あおぞらたかたな 小指一本

男は少年に見えないよう小さく笑う。

その顔はまさに獨獮な野兽の様な笑みだった。

少弒が氣付く前に寧謐な笑みを引つ入れると、代

みを浮かべる。

悪魔はウソはついても、約束は破らないもんだ

「絶対だからな！」

そう言い残すとHミーゼルは部屋から走つて出て行った。  
その後ろ姿を苦笑しながら見送る男。

「まつたく・・・・・・ハゴスには微塵も似てねえなあ」  
「余計なお世話だ」

「うお！？」

いきなり後ろに出てくんなど！」

「フン、お前が隙だらけなのが悪いのだらう？」

「真後に転移されて気付つてのは、なかなか無茶言つてくれるぜ」

男の後ろに音もなく現れたのは、Hミーゼルの父で魔界の大統領ハゴス。

その本当の姿を見た者は魂すら残さず消滅するとまで言われている  
男だ。

そんな人物に家庭教師の男は親しげに話しかける。

お前にはな（」

「わかつてゐるとは思うが、来年までだぞ？

そう言う約束だからな・・・・・・

「ああ、それで借しは帳消しだ。

頼むぞ、アグニス」

そう言い残すとハゴスは転移の術式で執務室へと移動した。残された男は小さくため息をつく。

「ここではアグニツ呼べよな、何のための偽名だつづうの。それにしても、はあ・・・・・つまんねえなあ。とりあえずあの餓鬼ほつといたらうつせえし、様子でも見に行くかね！」

男はポケットに手を突っ込み部屋を出て行つた。

今は昔、人は闇を恐れていた。

闇を恐れ生きることで人は慎ましく生きることができていたのだ。しかし・・・・・人間の科学力が進化することで、徐々に闇を恐れることがなくなつてしまつた。

これはそんな人間たちを戒めるものたちの物語である・・・・・かもしがれない。

「くつそオ～、あの時アグーが声をかけてこなければ勝てたの...」  
「そんな簡単に注意を逸らすお前が悪いんだろっ。」

話しながら廊下を歩いているのは、所々に小さな傷を負ったエミー  
ゼルどっこか楽しそうなアグーである。  
どうやら訓練は惜しいところで失敗したようだ。

「どうわけでお前の質問には答えないからな

「少しごらい、いいじゃないか！」

「約束は約束だからな」

「ちえっ」

不満はあるが、これまで短くない時間を共に過ごしてきて彼が折れ  
ないことを知っているエミー・ゼルは諦めることにした。

その子供っぽい反応に苦笑しながらアグーは軽く頭を撫でる。

「まあ、惜しいところまで行つたんだ。  
次はイケるだろ？よ」

「・・・・・・当たり前だろー。」

ボクは魔界大統領の父上を持つ死神、エミー・ゼルだぞー。」

「そうだな・・・・・・。」

まあ俺はお前自身を評価してるんだがな

「同じ意味じゃないのか？」

「いつかわかるさ……（いつこのは自分で気付くもんだ  
しな）」

不思議そつに首を傾げる少年の頭をさつきよりも強めに撫でると、突然立ち止まつた。

そしてアグニは前方の柱を睨みつける。

「オイ、そこにいるヤツ出てこい」

「…………貴様に気付かれるとはな」

そつと柱の陰から現れたのはハゴスの側近兼秘書をしている魔界三豪傑の一角、雷帝サイロスだつた。

その顔はどこかアグニを侮蔑している様だ。  
しかしそんなことを微塵も気にせず、気配を殺して待つていた理由を尋ねる。

「お褒めにあずかり、恐悦至極…………で、なんの用だ？」

「チツ、生意氣な。

貴様の様な何処の馬の骨とも知れぬ輩に、子息を預けるとは、あの方は何を考えておるのだ？」

エミーゼルを見て、ため息をつくサイロス。

その溜息にエミーゼルは下を向き、小さく肩を震わせる。

アグニはそれを見て小さく舌打ちすると、少しだけ前に出てサイロ

スの視線を遮つた。

するとサイロスは視線をアグニの顔に移し、鼻で笑う。

「用があるなら、早く言え。

俺は早く部屋に戻りたいんだよ」

「ああ、そうだったな。

・・・・・大統領閣下がお呼びだ。

直ちに執務室へと来るよう」「

「わかった・・・・・それだけか？」

「本当に生意気なやつめ・・・・・あんまり調子に乗らないことだ。

お前なんぞ、私にかかるば一瞬で消し炭に出来るのだからな

「はいはい、わかったわかった。

魔界三豪傑様は忙しいんじゃないのか？

俺なんかに構つてないでさつさと行つたらどうだ

「チツ！」

自分の脅しに微塵も恐怖を感じていないアグニに苛立ちを感じつつも、サイロスはその場を去つていった。

消えてからもしばらくサイロスの去つていった方向を見ていたアグニだったが、ふと自分の服の裾を掴んで震えている存在に気付く。

「・・・・・どうした？」

「なんでアグニはサイロスが怖くないんだ？」

いや、サイロスだけじゃない。

お前が戦つてるとこにはあんまり見たこと無いけど、強さは精々中級悪魔くらいだろ？

なんで自分よりも強い相手にあんな風に接することが出来るんだ？

「なんでも言わてもなあ・・・・・・なんとなくだな」

「なんとなく！？」

「まああえて言うなら、俺はハゴスに頼まれて来てるわけだから、ハゴスの部下であるアイツらは手を出してこないだろうからな」

「それでも、もし隠れて手を出して来たらどうするんだよ！」

「お前死んじゃうんだぞ！！」

「そん時はそん時つてこ「そんなの嫌だ！」・・・・・大丈夫だつて、俺はお前が思つてるほど弱くないんだぜ？」

顔を歪め、目に涙を溜めて叫ぶエリーゼルに少し驚いたアグニーだが、その場にしゃがみ込んでエリーゼルに田線を合わせる。

「それに俺だつて死ぬ気は無い。

目的もあるしな・・・・・だからあんまり心配するな

「し、心配なんてしてない！！

た、ただお前がいなくなつたら家庭教師が居なくなつて困るから・・

・・・・

「ああ、わかつてるつて」

田元を袖で拭いながらそのままを向くエリーゼルを苦笑しながら見つめる。

そしてスッと立ち上がりエリーゼルに背を向けた。

「もう大丈夫だな・・・・・・さてつと、じゃあ行くとするかね」「何処に行くんだ？」

「どうやらハーネスが俺に用があるみたいだからな」「あ

「あ

「忘れてたのか・・・・・まあいいけどな。

お前は部屋に戻つて、今日の訓練の反省点を纏めとべりがつ。  
特に最後の魔法の撃ち合いのことな

「わかった

「よし、じゃあな

アグニはエミーゼルに背を向け、廊下の曲がり角へと消えていった。  
その背中に向けて小さく呟いた「ありがとう」という言葉はアグニ  
に届くことはなかったが、その気持ちは伝わっていたことだらう。

## 第1話（前書き）

一人お気に入り登録していただいたので、二話目も上げます

## 第1話

執務室の前に着いたアグニは、ノックもせずにいきなりドアを開ける。

すると中には豪華なイスに座つた魔界大統領ハ、ゴスの姿があった。

「来たぞハ、ゴス、何の用なんだ？」

「・・・・・・ノックぐらいしろ。

もし我以外に誰か居たらどうするつもりだ」

「お前以外の気配感じなかつたし、実際居なかつたんだからいいだろ？」

「はあ・・・・・・もういい」

ため息をつき、首を小さく横に振るハ、ゴスだったが、やはりアグニはまったく気にしてない。

それどころか何故か胸を張つている位である。

気にしていたら話が進まないと思つたハ、ゴスは、早速用件の説明に入ることにした。

「お前を呼んだのは他でもない・・・・・地獄を知つてゐるな？」

「ああ、そりやあな」

「では地獄に『暴君』が居ることはどうだ？」

「一応は知つてゐる。」

そういうえばアイツ地獄でなにやつてんだ？」

アグニの質問にハゴスは顔を顰める。

何故そんな顔をするのかわからない彼は首を傾げるが、ハゴスの次の言葉にその顔は驚愕に染まる。

ちなみにここで言つ『暴君』は、ある悪魔の一いつ名である。

「・・・・・・・係だ」

「何だつて？」

「プリニー教育係だ」

「ふーん・・・・・・・って、はあ！？」

ここではディスガイアを知らない人に説明をしておくと、プリニーとは生前に罪を犯した人間の魂をペンギンのぬいぐるみのような物に詰め、その罪を誰かに呻くことで償つといつ存在である。投げられると爆発することから、爆弾の様に使用される場合もあるので非常に過酷な償いと言えなくもない。

追記するとプリニーには心得が存在し、一番最初の心得は語尾に「ツス」を付けると言つものである。

「なんでもまたそんな仕事してんだ？」

「理由は知らんが、魔力を失つてることと関係があるのでないか？」

「アソツまだ血吸つてないのか！？」

「何百年経つたと思ってんだよ・・・・・・・

「あやつの約束に対するこだわりは、凄まじい」

二人は昔の暴君を思い起こし、懐かしだ。

決して心温まる思い出など無いが全力で戦っていたときは、まるで恋人との逢瀬のように心躍つたものである。

しかしアグニは「」に昔の知り合いの話をしに来たわけではない。

「で、アイツがどうしたんだ？」

「結論から言つと、地獄で暴れ始めたよつだ」

「ほう！ そりやあ面白い事になつてゐるな！」「

「面白がつている場合ではないぞ」

「俺にはあんま関係ねえしなあ」

「いや、関係はある」

「は？」

アグニは現大統領府に隸属しているわけではない。故に暴君が政府転覆を企もうがあまり関係ないのだが、ハゴスが言うにはどうやら関係があるようだ。

その理由を聞くために耳を澄ますアグニ。

「先ほど反逆を止めようと地獄へ刺客を放つたのだが、撃退された

ようなのだ」

「腐つても『暴君』だな。

吸血鬼の頂点は伊達じやないってことか

「茶化すな。

・・・・・そこで援軍を送る」とこしたのだ

「誰を送るんだ？」

その言葉を受けて、ハゴスの表情が歪む。

まるで自分の身が切られる苦痛を感じているよ！」

「なんだよ？」

「アバドンだ」

「特殺任務部隊か・・・・って、おい！」

あの部隊のトップは！？」

「そうだ、我が息子・・・・エミーゼルだ」

特殺任務部隊『アバドン』とは、その昔魔界が荒れていたときに猛威を示した部隊である。だが現在は名前は物騒だが今まで実戦経験も殆どなかつたお飾り部隊であり、構成メンバーも若く余り力のない悪魔で構成されている。

そんな部隊の隊長を、何故大統領の息子が務めているのかは・・・・  
・いざれ語るときが来るだろ！つ。

「アイツをまだ実戦に出すのは早いぞ！」

その任務は魂を狩ったことのない死神にとつて、荷が重すぎるだろうが！」

「それは分かつているつもりだ。

しかし反逆者の処理は特殺任務部隊の仕事だ」

「・・・・どうしても行かせるのか？

下手するとあの餓鬼死ぬぞ」

「大統領として特例扱いは出来ん」

組織のトップは常に冷静且つ客観的な視点を持たなければならぬ。  
例えそれが自分の息子の危機に繋がろうとも・・・・。

「話は分かった。

だが俺を呼んだ理由が分からねえ。

お前は俺に何をさせたいんだ？」

そう聞くとハゴスはイスから立ち上がりアグニに向かって歩き始め、アグニのおおよそ2メートル手前で立ち止まつた。  
その目には強い意志が宿つている。

「頼む・・・・・息子に付いてやつてくれ。

自由に動けるのは貴様だけなのだ。

部下を使えば公私混同と言われ、内部で反乱が起こるかも知れん」

「・・・・・・・・・

「貴様は今の魔界の現状を知っているだらう。

地獄では現政府に不満を持つている者も多い。

・・・・・それに『彼奴』のこともある。

だから頼む」

そう言って深々と頭を下げる姿は、魔界大統領ハゴスではなく、一人の父親の姿だった。

アグニはその姿を見て、一端何かを考えるように目を開けた。  
そしてゆっくりと目を開けた。

「俺もアイツほどじゃないが、交わした約束は守る。

俺がお前と交わした約束は、過去の借りを帳消しにする代わりに息

子の面倒を見る」と。

「……………ミニーゼルの近くに居ないと面倒を見れないだろ？」「

「……………すまんなアグニス」

「……………俺は約束を守るだけだ」

こうしてアグニの地獄行きが決まった。

ちなみにアグニは地獄へ行つたことがなく、地獄に何があるのかと顔には出さないが若干楽しみにしている。

地獄のことを考えていると、ふと一つの疑問が思い浮かぶ。

「そういえばアイツは、なんで反逆始めたんだ？」

「今プリニーの数が増えすぎているのは知っているな？」

「まあ一応な」

「故にプリニーを出荷せずにある程度処分する事にしたのだが、その処分するプリニーがアヤツの教育していたプリニーだったたらしいのだ。

アヤツはそのプリニーどもに、出荷する前にイワシを馳走する約束をしていたらしく。

その約束を守るためだと聞いている」

「……………変わらないなあアイツ」

「そうだな」

「だが何故イワシなんだ？」

「……………知らん」

これから戦うかも知れない相手のことと思い出しながら、何故か少し和んだ二人だった。

果たして地獄には何が待ち構えているのか？

そして『暴君』とは一体どんな悪魔なのか?  
全ては地獄で明らかになる。

## 第1話（後書き）

Hミーゼルマジ天使 w

……まあ俺が一番育てたのは「デスコ」なわけだけども！

今なら結構安い値段で「ディスガイア4」は買えるので興味がある方は是非

ちなみに後日談やアpend「ディスク」の敵は結構レベルが高いので、もしやるかたはお気をつけを……レベル5000とかだよ？

いやまあ、後日談の最後に出てくる奴が一番鬼畜なわけだけども一度した攻撃はダメージゼロで、こつちは相手の攻撃食らえればほぼ

確実に死ぬという中々の鬼畜っぷり

装備整えて、装備品のレベル上げて、一気に落とすのが常套手段

## 第2話（前書き）

そろそろ資格試験の勉強を本格的にしなきゃならないな……趣味は  
しばらくお預けかな？

## 第2話

執務室を後にしたアグニーは、地獄に行く」とを伝えるためにHミーゼルの部屋へと向かう。

長い廊下を歩いて部屋の前に着きドアを開けると、アグニーに言われたとおりに机で今日の訓練の反省を書き出しているHミーゼルの姿があった。

「おお、やつてんな。  
真面目だねえ」

「つよい！ お前がやれって言つたんだろ！」

振り返つて怒鳴つてくるHミーゼルだったが、アグニーは微塵も気にしていないうだ。

むしろその反応を楽しんでいるかの如く笑顔である。

アグニーは笑顔のまま机の上にあつた反省点の書かれたレポートを取り、読み流す。

レポートには最後の相手を倒したと思って氣を抜いていたら、生き残つていた相手に不意を突かれて負けたと書いてある。

まだまだ精神的な粗が目立つ内容だったので、若干眉をひそめたアグニーだったが直ぐに表情を元に戻しレポートを机の上に戻す。

「そうだつたか？」

・・・・・まあいいじゃねえか。

そんなことよりハゴスから伝言があるぞ？

「父上から？」

エミーゼルとハゴスは最近直接会つことも殆どなく、そんな父親から突如伝言があると言われ疑問を感じたようだ（ちなみに言つておくと別に家族仲が悪いわけではなく、ただハゴスが忙し過ぎるだけである）。

アグニは地獄で反逆が起つたことと、その鎮圧にエミーゼル率いる特殺任務部隊アバドンの出動が決まったことを話した。すると顔を青くしたエミーゼルがアグニに問いかける。

「ボ、ボクが！？」

「そう、お前がだ。

何か問題でもあるのか？」

「え、でも、だつて・・・・・」

「まあ決定事項らしいから断れないみたいだぞ？」

「そんなどつてボクは・・・・・」

まるでこの世の終わりのような顔を浮かべるエミーゼルに苦笑するアグニ。

無理もない。

地獄にいるのは弱体化されているとは言え、魔界有数の極悪人達。まだまだ経験不足のエミーゼルが怖がるものしあうがない。とりあえずこのままではまともに会話も出来ないので、まずは落ち着かせることにした。

「まああんま怖がんな。

一応俺もついて行つてやるからよ

「ほ、ホントか！？」

「うお！？ 本当にから落ち着け！」

俯いていたエミーゼルはバツと顔を上げ、アグニに掴みかかる。流石に掴みかかってくるとは思わなかつたアグニは、一瞬はじき飛ばそうとする自身を無理矢理押さえ込んだ。

ここで否定的な行動を取ると、またエミーゼルはネガティブモードに入つてしまつたために、正直結構心拍数が上がつたアグニだつた。だが一つだけ忠告するために、アグニは顔を引き締める。

「ただし俺は極力戦闘に参加しないぞ？」

俺が狙われたら話は別だが

「え？ なんで？」

「俺はアバドン所属じゃないしな。

もし俺が戦闘に参加したら、出しゃばるなつて言われちまうだろ？」

「…………そつか、そうだったな」

少しだけガッカリしたようだが、最初に比べればマシな精神状況になつたようだ。

知らない場所に一人で行くのは結構不安も大きいから、知り合いが一人でも多い方が気が楽なのだろう。

アバドンのメンバーは完全に上司と部下の関係な上、エミーゼルに従つている理由が魔界大統領の命令だからという理由なので、完全なビジネスライクな関係故に数には入れない。

エミーゼルは自身の頬を叩き、気合いを入れる。

「よしつ！」

待つていろお、地獄の反逆者どもめ！

大統領の一人息子、死神エミーゼルが鎮圧してやるぞ……」

「その調子だ！」

気持ちで負けてたら何もできねえからな（まあ今回はちょっと相手が悪いかも知れねえが、最悪コイツ連れて逃げりゃいいだけだしな）

「

アグニは最悪エミーゼルだけ生きていれば問題ないので、アバandonが全滅しようと気にしない。

下手に手を広げすぎると、大事なものがこぼれ落ちてしまつかも知れないから・・・・・・。

少し物思いにふけるアグニだったが、まだ任務開始日時を伝えていなかつたことを思い出す。

「出発は明日の朝だ。

しつかり準備しておけよ？」

「わかった！」

明日はよろしく頼むぞ！」

覚悟が決まつたエミーゼルの瞳にはこの任務を必ずこなしてみせると、決意の炎が燃えさかつている。

尊敬する父から頼まれた任務。

今まで目立つた功績のないエミーゼルにとって、張り切らない理由はなかつた。

ただ反逆しているのが誰か確認しなかつたことが、彼にどんな結果をもたらすかはまだ誰にも分からぬ。

そしてアグニは聞かれない限り教えるつもりは無い様である。コレも一つの教育と考えているのだろう。

「じゃあ、また明日な」

「うーん・・・・・・杖はアレで良いとして、ロープはどうしようかな？」

いや・・・・・・でも・・・・・

もう明日の任務の事を考えているのか、アグニの挨拶すら聞こえない位思考に没頭しているエミーゼル。

そんな余裕のないエミーゼルを見て肩を竦めるアグニだったが、ふと自分の過去を思い出し苦笑いを隠せなかつた。

誰かに褒められたい、誰かに認められたいという想いを抱いたことがないアグニにとって、エミーゼルの気持ちは余り理解出来ないものだつたが、昔は自分よりも強い相手と戦うときによれくらい緊張してたなあと過去を振り返る。

そのまま部屋を出て自分の部屋へ向けて歩き始めるアグニ。

昔の事を思い出した彼は、ふと昔の仲間達に会いたいといつ気持ちが少しだけ湧いたようだ。

「明日もし加勢する事があるなら、久しぶりに誰か呼ぶか・・・。

今のアッシュがどの程度の力を持っているかわからねえし、備えあれば向とやらつて言つしな

廊下で呟いたその言葉には、どこか楽しそうな気持ちが込められて

いた。

彼の特殊能力は仲間の召喚。

魔物使いの突然変異種たる彼しか持ち得ぬ能力である。

その呼び出す相手によつては、明日の地獄は文字通りの地獄になるかも知れない。

「そうと決まれば誰を呼ぶか考えておかないとな！」

誰を呼ぶか考えているその姿は、遠足を楽しみにしている子供の様に純粋に見えた。

例えその結果が激しい戦いになるのだとしても・・・・・・。

### 第3話（前書き）

ゼロ魔……考え中

ディスガイア4……試行中

なんにせよ1-2月にやらなきゃいけない」とあるから、あんま身  
が入つてない感じが……

### 第3話

魔界最下層の『地獄』と下級悪魔が住まう下層区の境目・・・・。  
そこにはエミー・ゼル率いる特殺任務部隊アバドンと、付き添いで来  
ているアグニの姿があった。

眼下に広がる頑強な皆のような刑務所『地獄』は、エミー・ゼルに大  
きな緊張を与えていた。

「あ、アレが地獄・・・・」

「大丈夫ですかエミー・ゼル様？」

「だ、大丈夫に決まっているだろ！」

オレ様を誰だと思ってる！！

大統領の一人息子、死神エミー・ゼルだぞ！？

「そうでございました。

これは入らぬお世話を・・・・」

アバドンの副隊長でもある死告族に心配されつつも強がるエミー・ゼ  
ルだったが、足は震え顔色も良いとは言えない。

そんなリーダーの姿に不安を隠せない隊員達。

ちなみにその時アグニは、少し離れたところで欠伸をしていた。  
たまに向けられるエミー・ゼルからの視線にも気付かない振りをしな  
がら・・・・。

「ふあああああ・・・・眠つ

「貴様もついてきたのなら気合いを入れり

「そうだ、そうだ！」

戦闘も碌にしない悪魔が暇そつにするなんて生意氣だぞ！」

「ああ、そいつあ失礼。

今後気を付ける・・・・・かもしぬないわ」

ここでもアグニの扱いは余り良くないようだ。

その評価も当然なのかも知れない。

何故かというと、アグニは今の家庭教師という立場になつてから戦闘を行つたことが殆どなかつた。

それどころか殆ど大統領府内をうろちょろしていふところか、昼寝しているところしか見られていなかつたのだ。

もちろん彼の部屋などのプライベートの部分は知られていないが、よく見られる姿がだらけていふところなのでコネで入つてきた残念な悪魔という印象が強いのである。

ちなみに数少ない戦闘と言うのは、エミーゼルに強請られて軽く模擬戦をやつた位なのでアグニの正確な戦闘力を知っている者はここに存在しない。

「かの有名な『孤軍』に似た名を持ちながら・・・・・情けない！」

「ちよつとは前に出て戦つたらどうだ！」

「そうだ、そうだ！ 戦つてみろお！」

「いやいや、俺戦い苦手だし。

地獄の極悪人相手にしたら死ぬぞ？

（どうせコイツら戦つたら戦つたで文句言うんだろうなあ・・・・・・

・めんどくせえ）」

「フン、腑抜けが！

もういい、各自進行用意だ！」

「――「了解！」「――」

完全にアグニを視界の外に追いやり、地獄へ向けて歩を進め始めたアバドンの面々。

しかしその所為でアグニの咳きを聞き取ることが出来なかつた。

『つていうか弱いもの虐めなんかしても面白くねえしな』という咳きを・・・・・。

そんな若干の衝突もありながら、ついに地獄へとたどり着いたアバドン+。

地獄の中は少し騒がしく、囚人たちはその口々に反逆者達について話している様だ。

エミーゼルは話を聞くために囚人たちの監獄へと近づいていく。

「オイ、反逆者について何か知つているか？」

「ア？ 何だこの餓鬼？」

餓鬼は家に帰つてクソして寝な」

「な!? オレ様を誰だと思っている!」

オレ様は大統領の一人息子、死神エミーゼル様だぞ!」

「な、なんだと!?」

監獄内がにわかに騒がしくなる。

やはり大統領の息子という肩書きは大きな意味を持つようだ。

囚人たちは話し合いを始め、数分後に一体の悪魔が前に出てきた。どうやらこの囚人グループのリーダーのようだ。

「初めてまして坊ちゃん。

で、何をお聞きになりたいんで?」

「今地獄を騒がせている反逆者についての話を聞かせろ」

「ふむ、わたくし達もそれほど多くの情報があるわけではありませんが、お教えたしましょう」

どこか老成している猪人族の話を聞いてみると、どうやら反逆者はプリニー 教育係の一人であり、地獄の獄長もその仲間らしいこと。

他にも幾つか情報はあつたが、その殆どが伝える際に歪んでしまつたであろう情報ばかり。

たとえば反逆者は身の丈10メートル以上だと、その強さは魔界大統領に匹敵するなど様々だ。

この情報を真に受けたエミーゼルは動搖しながら、アグニへと視線を向ける。

するとアグニが小さく首を横に振り、その情報は信じなくて良いと伝えてくれた。

それを見て少しだけ気を取り戻したエミーゼル。

「もういい、雑談に戻ってくれて良いぞ」

「あの、坊ちゃん。

坊ちゃんは何をしに来たんですか？」

やつぱり・・・・・

「多分想像している通りだ。

オレ様達は政府に仇なす反逆者の拘束、もしくは排除が目的だ！」

そつ自分で言つておきながら、排除という単語のところで若干顔が歪んだ事に気付いた者はいないようだ・・・・・アグニ以外には。アグニはそんなエミーゼルを見て、『やはり殺す覚悟はないか・・・

・・・面倒なことにならないと良いけどな』と心の中で思っていた。今回の任務に極力手を出さないと決めているアグニにとって、この任務は若干面倒くさいアトラクション程度の印象しかないのだ。

「やつですか・・・・・とこりで坊ちゃん。

情報を教えた報酬はないんですかね?」

「報酬?」

「流石に何もなしつてワケじゃなこですよな?」

そづズのきいた声でHミーゼルに報酬を求める囚人。

その迫力に少し圧され、一步後ろに下がってしまったHミーゼルだったが、このままでは舐められると感じ、やけで踏みとどまつらがみ返す。

「いいだらう、父上に口利きしてお前達の刑期を少し縮めてやるわ。  
それでいいか?」

「そりやあ、ありがてえ!」

おい、聞いたか野郎ども!—!

この坊ちゃんが刑期短くしてくれるとこよ!—

感謝しろよ!—!」

「——あつがとひづれこやす、坊ちゃん!—!」「

「せ、全員か?」

それはちょっと・・・・・・

「あ? 何か仰いましたか坊ちゃん?」

「い、いや。なんでもない。」

それじゃあ行くぞ!—!」

そつ言い残して足早にその場を去るヒーナー。

置いて行かれまいとしてアバドンも早足でその後を続くが、たった一人だけその場に残っていた。

その場に残ったアグニは再び雑談に戻ろうとする悪魔を一体呼び止める。

「なあ、そこのお前」

「あん？ なんだテメエ？」

坊ちゃんの部下かなんかか？」

「似たようなもんだ。

で、ちょっと聞きたいんだが、ここのはりーー教育係の名前って知つてるか？」

「名前？ ああ、確かヴァルなんとかつてやつだつたと思ひぜ？」

「もう一人の名前も分かるか？」

「そつちはフエンなんとかつてやつだ。

なんでそんなこと聞くんだ？」

「いや、有名な悪魔だつたら戦つときには気を付けなきゃならねえからな」

「ブリニー教育係になるようなヤツが強い悪魔なワケないだろ？」

「心配しすぎだと思うぜ？」

「そうかもしだねえな。

じゃあ情報サンキュー、有意義な地獄ライフを過ごしててくれ

「余計なお世話だ！」

そつしてアグニもようやくヒーナー達の後を追い始めた。  
ヒーナーの後を追っている最中アグニは情報をまとめた。

「（ハゴスから聞いてはいたが、本当にヴァルバトーゼの野郎、プリニー教育係なんかやつてたのかよ・・・・・。それにもう一人のプリニー教育係はフェンリッヒか？何でヴァルバトーゼとフェンリッヒが連んでいんのか知らねえけど・・・・・コレはあの餓鬼にとつて厳しすぎるな）・・・・・どうすっかなあ」

悪化した現状をどうするか思考するアグニ。

暴君ヴァルバトーゼとその従者フェンリッヒを相手にするには戦力が足りなすぎる。

自分が加わればいい勝負が出来るだろ？が、別に敵対する理由もない（戦うこと自体に余り抵抗はないが、全力を出せない相手と戦うのは面白くないと思つてゐるため、あまりやる気が無いのである）。とりあえず会つてから考えることに決め、いい加減追いつかないと不味いと思い、足を速めていった。

### 第3話（後書き）

エクストリームバーサス楽しみだなあ  
……頑張つて師匠を使いこなせるようになないとなー！

## 第4話（前書き）

いやつふ

もう読み専に戾ひつか迷うくらいに集中力が無くなつてゐるぜい  
まあそんなこと言いつつもなんか書くと思いますがw

## 第4話

## 第5話

少し遅れたアグーが合流する頃には、既に反逆者達との舌戦が始まっていた。

昔聞いた声よりも若干幼い気がするが、過去に暴を競い合つた一人の悪魔を思い起させる声だ。

どうやらエミーゼルは暴君に子供を相手する気は無いと一蹴されたようだ。

「さっきの囚人もそうだったが、お前もか！  
オレ様を誰だと思っている！」

魔界大統領の一人息子、死神エミーゼルだぞ！」

「それがどうし「な、何だつて～～～～～！大統領閣下の一人息子様であらせられるとは～～」た

「そうとは知らず無礼な態度を取つてしまい、マジですいませんでした！！

コイツの言うことなんか微塵も聞かなくともいいんで、オレ様の話を聞いてくだ「良い度胸だな、貴様・・・・・ヴァル様の話を遮るとは・・・・イヤ――――助けてエミーゼル様ああ

！！！」

なんかコントみたいなものが始まっているのだが、一步離れた位置で冷静に現状を把握し始めるアグー。

先ほどからうるさく騒いでいる派手な真っ白い衣装を着ているのは、

おそらく地獄の獄長だろ？

ヴァルバトーゼのことは知っているし、フェンリッヒが人狼であることも知っている。

しかし騒いでるヤツには見覚えが無かったことからアグニは、そう認識した。

突然始まった漫才にキヨトンとしていたエミーゼルだが、未だ騒ぐ二人を視界から外し、先ほどヴァル様と呼ばれていた男に話しかける。

「何故お前はオレ様に平伏しない？」

「お前は大統領が怖くないのか！？」

「俺が恐れる？」

何故そんなことをしなければならんのだ。俺には貴様を恐れる理由など無い」

「分からぬのか！？」

オレ様の親は魔界大統領なんだぞ！」

「貴様の親が誰だろうが、貴様自身を恐れる理由にはならん！」

それに俺が恐れるのはただ一つ。

イワシの小骨と、約束を破ることだけだ！！

大統領など知るかあ！！」

そう言つて胸を張るヴァルバトーゼに気圧されるエミーゼル。

いつの間にか戻ってきたフェンリッヒも追撃を加える。

「閣下が大統領ごとき恐れるものか！ 我が主を舐めるなよ！」

「なんなんだよお前ら！？」

「クソッ！ お前達と話しても埒があかない。」

何にしてもお前達は反逆者なんだ！  
力尽くでも従つてもうつづ！

お前達！ 行け！！

HIII-ゼルの号令をきつかけにアバドン第一分隊が突撃し、激しい戦闘の幕が開ける。  
しかし戦闘経験の差か、序盤からアバドンは劣勢だった。  
腕が、脚が、首が空に舞う。

「うぎやああああ！ お、俺の腕があああ！」  
「駄目だあ、勝てねえ！」  
「俺はこんなとこで死にたくねえ！」

HIII-ゼルはドンドンと減つていいくアバドンの構成員に動搖している。

それに反して淡々と屠つしていくヴァルバトーゼとフュンリッヒの反逆者コンビを見て、アグニはそろそろ動いた方が良いかもしれないと自分の装備を確認し始めた。

最後の一人が倒れたとき、愛用武器の仕込み杖を片手にいつでも飛び出せる様にするために。

そしてついに最後の一人が地に伏した。

「お、オイ！  
もつとしつかりしろよー。」

「小僧・・・・・お前は来ないのか？」

お前も一端の悪魔ならば覚悟を見せてみるー。」

「く、言われなくても、お前達なんかオレ様一人で充「はい、そこまでえ」アグニ！」

「引くのも勇気つてもんだぜ？」

「今は様子見つて事でいいじゃねえか」「でも！」

「まあまあ、とりあえずお前は門のところに残してきた本隊を呼んできな。

流石に一対一は辛いだろ？」「

「お前はどうするんだよ！」「

戦わないんじゃ無かつたのかよ！？」

「戦わないさ、ちょっと時間稼ぎするだけだ。

いいから行きな

「・・・・・急いで戻つてくるからな！

死ぬなよ！

そう言い残して走り去るHミーゼルを見送り、アグニはヴァルバト一ゼ達と対峙する。

今ここに立っているのは三人だけ。

「つたく死亡」フラグっぽいからヤメ口つてんだよ・・・・・なあ、  
暴君さんよお

「・・・・・アグニスか」

「久しぶりだな、そっちの人狼君ははじめましてだな」

「・・・・・ヴァル様、知り合いですか？」

それに先ほどアグニスと呼んでいましたが、小僧にはアグニと・・・

・・・

「小僧がなぜアグニと呼んでいたかは知らんが、コイツはアグニスだ。

お前も『孤軍』の話は聞いたことがあるだろ？

「『孤軍』…………召喚師アグニスですか？」

しばらく噂を聞かないと思つたらこんなところで何を…………

「俺もやりたくてやつてるわけじゃねえよ。

後アグニは今の名前だ。

今は大統領府にいるからな…………あんまり立ちたくないんだよ。

弱いヤツに集られるのは好きじゃねえしな。

で話は変わるが暴君よお、俺は別にお前と事を構える気ないんだわ

「何？」

「今は訳あつてさつきの餓鬼の子守してるんだが、別に俺はお前を討伐しろって言われてるわけじゃねえ。

それに俺が人の命令聞くようなタイプじゃねえのは知つてんだろう？」

「…………目的はなんだ」

「目的？ ああ…………うーん、あの餓鬼を殺させないことかね？」

「分かった。あの小僧の命は保証しちゃう

「ヴァル様！？」

「そりや、助かる。

んじや俺はあんま手出さねえわ。

一応周りのレベルに合わせて動くが、自衛に關してはちょい強めに行くからな？。

さてと…………それなり合流したかねえ。

じゃ俺はこいら邊で。

あ、一応礼として教えとくわ。本隊はさつきの奴らよりは強いだろうが、お前達程じやねえから氣楽にやつてくれ。

今度こそ、じゃあな！」

アグニはそのままどこかに転移していった。

消え去つた男の立っていたところを見ているヴァルバトーゼに従者フェンリッヒが囁みつく。

「何故何もせずに逃がしたのですか！？」

「彼ら『孤軍』とはいえ閣下にかかるれば・・・・」

「そうかもしかんな・・・・だがヤツの真価は召喚能力にある。もしここでヤツの切り札の一つを使われば、かなり厳しい戦いを強いられるだろう」

「ヤツの切り札・・・・ですか？」

「フェンリッヒよ、命奪の森を知っているか？」

「ええ、触れた者の命を奪う巨大な粘泥族の突然変異種がいるという・・・・まさか」

「ヤツの切り札の一つはそれだ。

俺達だけならば何とかなるだろうが、プリニーーどもはそうはいかない。

故にもしヤツと事を構えるならば、地獄の外でやらねばならんのだ

「そうですか・・・・全ては我が主の為に」

それぞれが自分の目的の為に突き進む。

少年は父のために、暴君は約束のために、従者は主人のために、そして過去の名を捨てた男は・・・・一体何を思うのか？

## 第5話（前書き）

エクストリームバーサス発売まであと少し  
士補試験まであと少し……onz

## 第5話

予想外の相手との遭遇をしたヴァルバトーゼ達は、本来の目的である処分される予定のプリニーを解放するために歩を進める。しばらく歩くと彼らの町に、先ほどよりも多くの悪魔を連れたHミー・ゼルが立ちふさがっているのが見えた。

「反逆者ども！」「」でキサマラの反逆もお終いだ！！

今頭を下げて謝れば、捕まえるだけにしてやる！

抵抗するならオレ様由らお前達に鉄槌を下すことになる・・・・。  
どうだ！？

降参するなら今の内だぞ！？

「ぐどい！」

俺はただ約束を守りたいだけだ！！

早くそこをどけ！！

「ぐう・・・・・・（やつぱりこいつなるのかあ）。

いいだろ？！ ならば力尽くで連行するぞ！」

「ちょっと待て〜〜〜〜、オレ様は反逆者じやないぞー！  
お坊ちやま〜〜、どうかお許しを〜〜！」

そう言いながらHミー・ゼルに駆け寄つていく獄長だったが、その後ろで何か企んでいる様な笑いをする者が一人・・・・。  
フェンリッヒは大きく息を吸い込んだ。

「おお！ 流石はアクターレ獄長！

敵のリーダーである死神エミー・ゼルの首を取るために特攻して行つ

たぞ！

しかも相手を油断させる演技まで・・・・・・やはり獄長は勇敢だ  
！――

「んな――？」

この言葉を聞いて戦闘態勢に移行するアバドンの面々。  
一気に場の空気は緊張していく。

そんな中アバドンのフロンリッヒは、さらに追撃を加える。

「ブリニーのためにそこまで身体を張るだなんて、わたくしフロン  
リッヒ、涙で前が見えません！――」

「やうだつたのかアクターーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー  
スマン、俺は貴様を疑つ  
てしまつていたようだ。

お前の勇氣しかと受け取つた！ 思う存分暴を示すがいい！

「ええ――？ ウソだつたの――？

つていうか「ゴイツボクを殺すつもりなの――？」

アクターーーは弁解の機会を『えられず、ドンドン窮地に立たされて  
いく。

全ては策士フエンコッヒの思つがままに・・・・・・。

「ち、違つんです！

これは・・・・いやああああああああああああああああああ――！――

！」

「『うひぐへるなあああああああ――！――

首を狙われていると思ったエミーは自分の武器である、杖を頭上高く掲げてアクターへと向ける。

次の瞬間、振り下ろされた杖はアクターをとらえた。バコッという音と共に頭部に当たった杖。

「ア・・・・・アクターレエエ————！————！」

ヴァルバトーゼの悲痛な声が響き渡る。ゆっくりと倒れていくアクターレ…………。

「貴様……よくも同士を……！」

ボケの武器にて・・・・・

貴様の尊姿は決して忘れない  
安らかに眠れ。　お前は空で見ているがいい。

俺が貴様に変わり、プリニー共を解放してやるとこひをーー」

エリーゼルは疑問の答えを得ることなく、新たな疑問にぶつかる。

「ブリーチだつて！？」

お前、プリーーのために反逆してるのか！？」

「それは違うぞ小僧！」

俺はプリニーのために戦うのではない。

プリニーとした約束のため・・・・・イワシのために戦うのだ!

！」

「バカじゃないのか！？」

そんなもののために命をかけるなんて！」

「俺には俺の譲れないものがある！」

この戦いはそのためのものだ！！」

ヴァルバトーゼは、そう言って斬りかかってくる。

その一太刀はアバロン副隊長の手によつて止められたが、それが開戦の狼煙となつた。

「H!!」ゼル様は援護をお願いします」

「う、うん！」

「反逆者ども！ H!!ゼル様を倒したいのならばまずは私を倒してみるがいい！」

「ほう、貴様…………名は？」

「反逆者どもに名乗る名などないわ！」

死告族の副隊長はその手に持つ大鎌がヴァルバトーゼの剣を弾き、距離を取る。

どうやらフエンリッヒは周囲にいる大量の悪魔と戦っているらしい。

「貴様…………テスカトリポ力か。

少しは骨がありそうだな」

「ほう、馬鹿ではないようだ…………しかし実力の方はどうかな！？」

「クッ！」

テスカトリポカとは死告族のランクの一つであり、中級悪魔クラスの力が無ければなれないものである。

その副隊長による、まるで嵐のような乱撃に防戦を強いられる。どうやらHミーゼルは呪文を唱えている途中のようだ。

「副隊長！ ちょっと離れてくれ！」

「喰らえ反逆者！」

「ウイング！ ！」

「クツ！ 伊達に隊長をやつていいわけではないよつだな！ だが、この程度オ！」

ヴァルバトーゼが気合いを入れ、大きく剣を振るとHミーゼルが放った風の塊は二つに裂け、その攻撃力を散らした。しかしそれを予想通りとばかりに副隊長は追撃を加える。

「おかわりだ、ウイング！」

「甘い！ 返すぞ！」

今度は切るのではなく、剣の腹で風の塊を打ち返す。流石にそれは予想出来なかつたのか、副隊長は避けきれずに直撃してしまつた。

「何ッ！！ ガアッ！？」

「副隊長！？」

「オマケをくれてやるわ。  
カズイクル・ベイ！」

ヴァルバトーテのマントの一部が「コウモリへと変化し、副隊長の下へと高速で飛んでいく。

そしてコウモリは敵に近づくにつれて、その姿をまるで巨大な牙のように変化させる。

自身の放った渾身の風魔法が直撃した副隊長は身動きが取れず、その牙を見ていてことしかできなかつた。

出来上がつたのは串刺し刑に処されたオブジェが一つ。  
飛び散つた副隊長の血がエミーゼルの頬に跳ねる。

「うあ・・・・・・・」

「・・・・・・・・・（じうしたもののか・・・・・・）」

「ヴァル様、そちらも戻りいたようですね」

「え、なんで！？」

「あんなにイッパイいたんだぞ！？」

「あんな雑魚が多くいたところで、何の問題もない」

「そんな・・・・・・・」

絶望に打ちひしがれるエミーゼル。

逆に反逆者コンビも困つていた。

アグニとの約束で少年の命を取ることは出来ない。

それ故にエミーゼルをどうすればいいのか迷つているようだ。

「とりあえずブリー共を解放するか

「そうですね・・・・・」

「お、お前達がここでブリー共を助けても、処分命令はもう出しているんだぞ！？」

「ここで助けたって意味ないじゃないか！」

お前達はコレで完全に政腐の敵として狙われる・・・・・それで  
もいいのかー？」

フェンリッヒはその言葉を無視し、ブリー共の閉じ込められる檻の扉を開ける。

こうしてヴァルバトーゼはブリーを解放し、約束を果たすことが出来たのだった、めでたしめでたし。

・・・・・・まだまだ続くよ？

## 第5話（後書き）

まず一つ補足、ディスガイア4のシステムの一つに転生といつシステムがある。

この転生というのは種族やクラスの変更を可能とするもので、転生前のレベルなどによつて転生時の基本ステータスを上昇させることができるものである。

テスカトリポ力は死告族のクラスの一つで、チエルノボグ（初期クラス） デス（2クラス） テスカトリポ力（3クラス） …… 3クラス目であり、ここまでに必要なのはチエルノボグでレベル40まで上げ、デスでレベル90まで上げることでこのクラスへの転生条件が整つ

因みに固有キャラクターを除くキャラクターには第6クラスまであり、死告族の最終クラスはタナトスと言い、ここまで行くには先ほどのことに続き、テスカトリポ力をレベル180まで上げ、その後のクラスで360まで上げ、その次のクラスで760までレベルを上げなければならない

ここまでやつてやつとレベル1のタナトスになることができる。  
正直原作のラスボスは何もしなければ100レベル位だつたはずなので、ここまでしなくても苦戦はしないはず（相手のレベルを変更しなければの話だが）

やりこみ始めるとレベルより、武器重要じゃね？とか思つたりもするけど、レベル上げないと億ダメージなんて夢のまた夢なんだよ……俺は一体分の最強武器手に入れた時点で気が抜けてしまつて他のゲームに手を出し始めてしまいましたがw

次にヴァルバトーゼが撃つたカズイクル・ベイは固有技の一つで、自身の体を巨大な牙へと変化させて相手にかみつく攻撃です。

原作では使い勝手のいい技ではなかつたので、あまり見る機会はなかつたです。

最後にディスガイア4の魔法は主にファイア系、クール系、ウインド系、スター系、ヒール系、ステータスアップ系、ステータスダウング系に分けられます

攻撃魔法に関しては メガ ギガ オメガ テラ の順に強くなります

テラ辺りになるとモーションも半端じゃなく、もうFFの召喚獣みたいなノリの攻撃です  
オメガはネタですがw

## 第6話（前書き）

エクバ始めました……自分の下手れに絶望

## 第6話

檻から解放されたブリーダー達がぞろぞろとヴァルバトーゼ達の前に並び始める。

その表情は安堵と感謝に満ちていた。

「助かりましたッス！！」

もう駄目かと思ってたッス！！」

「そうか・・・・・だがお前達の処分は既に決定しているらしいぞ？」

「マジッスか！？」

で、でも閣下が助けてくれるんッスよね？」

「俺はイワシの約束を果たしに来ただけだ。

その後にお前達がどうなろうと俺には関係ない。

・・・・・それに俺には新たにやることが出来た

「何ッスか？！」

俺達の命以上に大事なんスか！」

既に死んだ身であるが故に、ブリーダーの命には価値があるとは言えない。

・・・・・何にでも例外は存在するが。

「当然だッ！　俺はこれからこの墮落した政腐の性根を叩き直しに行かねばならんのだからなー！」

「な、何だつて～～～～～ッス！～！」

流石にこのセリフにはプリニー達も驚きを隠せないようだ。  
ついでに言うともう一人も・・・・・。

「ば、バツカじやねーの！？」

お前達一人だけで政腐がどうにか出来るわけないだろッ！－

「黙れ小僧！」

「ヒイツ！？」

「閣下がやると言つたらそれは決定事項なのだ。

お前の意見など聞いてないわ！」

そもそもお前達政腐が悪魔本来の役目である『人間を恐怖で戒める』  
ことを怠つていたが故にこの現状があるのだろうが－－

「そ、それは・・・・・」

「少し落ち着け、フェンリッヒよ。

だが小僧も、コレで分かつただろう？

この状況を知つてなお、こんな些末な事しか出来ぬ大統領の目を覚  
まさせるために俺は行かねばならんのだッ！！

「そ、それは重要なことツスけど、オレ達プリニーも助けて欲しい  
ツス！」

プリニー 教育係なら！」

「・・・・・それも一理あるかもしけんな

「閣下！？」

プリニーなど閣下が気にかけるような存在ではありません－

「そんなこと言わないでくれツス／＼！－」

フェンリッヒは悩むヴァルバトーゼを見て、何とか妥協できる条件  
を探していく。

今現在の戦力で政腐に殴り込むのは心許ない。

ならば忠実な部下が必要だ・・・・・そう考へたフンリッヒはニヤリと笑つた。

「どうしてもと詰つなら、お前達の生きていく道が無いわけではない」

「ホントッスか！？」

「ああ、本当だ。

お前達が選ぶべき選択肢は二つ。

大人しく政腐に処分されるか、閣下の忠実なるシモベとなるかだ！」

「そうだな、確かに俺のシモベになるのなら処分はさせん。

・・・・・ただし、俺のシモベはかなり辛いぞ？」

「・・・・・それでもいいッス！

オレ達死ぬまで閣下について行くッス！――

「そうか・・・・・ではついて来い！

戻つて作戦会議を行うぞ――」

「――「了解ッス～！」――

呆然とするエミーゼルを残し、ヴァルバトーベとフリードー達はその

場を去つていった。

そんな中フエンリッヒがエミーゼルに近づいていく。

「オイ、小僧」

「・・・・・なんだよ

「アグニス・・・・・いや、アグニに気を付ける。

アイツはお前の手に負える悪魔じやないぞ？」

「な、何を・・・・・」

そつ言い残すとエミー・ゼルの言葉も聞かずにヴァルバトーゼの元に走つていつてしまつた。

フェンリッヒは決してエミー・ゼルのためを思つて言つたわけではない。

むしろ信頼関係を搔き乱すために言つたのだ。

アグニが持ちかけた契約を考えると、彼がエミー・ゼルに危害を加える可能性はゼロに等しいのだから。

フェンリッヒの言葉に動搖するエミー・ゼルの元に、どこかでタイミングを計らつていたのかアグニが歩いてくる。

「おお、無事だつたか？」

「あ、ああ何とかな…………」

「ん？ どうした？」

「俺の顔に何かついてんのか？」

「…………お前はボクの味方だよな？」

「ああ、何言つてんだ？」

「いいから答えてくれ！」

「…………お前の家庭教師なんだから、一応味方になるんじやねえか？」

「そう…………だよな。」

「うん、そうに決まってるよな！！」

「わけわかんねえ…………。」

「で、これからどうすんだ？」

「え？ これから？」

まるで何を言つているか分からぬといつ顔をするエミー・ゼルに、アグニは大きくため息をつく。

周囲を見回すとアバランのメンバーの骸の山が出来上がっている。

「お前は何しに来た?」

「それは・・・・・反逆者を捕まえるか、倒すために」

「でもそれは失敗した。」

「じゃあ次はどうすんだって聞いてんだ」

「えっと、アイツらを捕まえるためには戦力が足りないから・・・・・

・・増援を呼ぶ?」

「ま、それが正解だろうけどな。」

問題は誰を呼ぶかだが、それに関しては俺に心当たりがあり「ちょっとそここの一人組!」・・・・・んだよ、邪魔すんなよ小娘」

せっかく現状を打破する案を出すところだつたところを邪魔された  
アグニは、若干機嫌が悪くなつたようだ。

話を遮つた張本人、突如現れた少女に文句を言い放つ。

「小娘!/? 失礼ね!!

私はもう中学三年生なんだから!—!」

「いや、小娘じやねえか・・・・・・」

「まあまあ、落ち着けって。」

でお前は誰なんだ? プリニーの帽子被つてゐみたいだけど」

「アタシ? アタシはプリニー殲滅部隊隊長、風祭フーカよ!」

「「プリニー殲滅部隊?」」

どうやら彼女の話を聞くと、悪人の魂の増加に伴つてプリニーの皮  
が足りなくなつたので、プリニーの数を減らすために創設された新

部隊らしい。

その話を聞いてエミー・ゼルが何かを思いついたようだ。

「なあアグニー！」

「コイツらと一緒にアイツらと戦つて言つのはどうかな？」

「マジで言つてんのか？ 僕にはコイツらが強いとは思えねえんだが……」

「いや、父上が許可を出したんだ。

きっと何かあるに違いないさ！」

「…………お前がいいならいいんじゃねえか？（せつかくアイツに声かけたんだがなあ）」

「じゃあ決まりだな！ オイ、お前！」

どこかイライラした様子を見せている風祭フーカ。

手に持った釘バットを振り回していることからそれが伝わってくる。

「何よ？ やつとアタシの話を聞く気になつたの？」

「その前にオレ様の話を聞け！」

知つているとは思うが、オレ様は魔界大統領の一人息子、死神エミー・ゼルだ！

「へえ～偉いんだ」

「今この地獄に政腐への反逆を企む輩がいるんだが、その反逆者を捕まえるための人員が足りないんだ！ だからお前達の力を貸せ！」

「反逆者？ もしかしてブリニーを解放したヤツらのこと？」

最初はエミーゼルの話を真剣に聞くつもりが無かつたフーカだったが、反逆者というワードに大きな反応を示した。どうやら彼女たちの目的もヴァルバートーゼ達らしい。

「ああ、アイツらがプリニーを解放したんだ！」

「ふうん、つてことは目的は一緒つて事かあ・・・・じゃあ、別にいいわよ？」

ただしリーダーはアタシだからね！！」

「な!? オレ様は大統領の一人息子だぞ！?」

「私の部隊なんだから私がリーダーに決まってるじゃない。アンタは・・・・助つ人？」

「助つ人!? オレ様は大統領の「まあ、落ち着け」・・・・アグニ！」

「別にいいじゃねえか助つ人でも、なんでもよお。大事なのはアイツらをどうにかすることだろ?」

（正直コイツらじや無理だと思うけどな・・・・明らかに統率取れてねえし）

アグニはプリニー殲滅部隊の面々をザッと見回してみたが、私語をする者、欠伸をする者、こちらを睨む者など明らかに纏まつていない。

おそらくリーダーであるフーカという少女に統率者としての経験がないのだろう。

歴戦の猛者であるアグニは一瞬でそれを見抜いた。

「それは・・・・・そうだけど」

「今は目的を果たすことだけ考えてればいいんじゃないかな?」

こだわりやら何やらは今は置いとけ。

アイツらに勝ちたいんだろ？

(それでもアイツら止められる可能性は万に一つなんだからよ)

「・・・・・わかったよ」

「話はついた？ ジャあ、しゅっぱ～つ！」

若干納得のいかないエミーゼルと他人事のアグニを加えたブリニー  
殲滅部隊は、『地獄』の奥へと足を踏み入れていく。

その戦力は未知だが、リーダーの風祭フーカの自信と余裕は何かあるのでは無いかと思わせるものがある。

果たして彼らの実力とは？

そしてエミーゼルは今度こそ、ヴァルバトーゼ達を止めることが出来るのか？

## 第6話（後書き）

フーカが人気らしいですが、俺のヒロインはテスコです  
風祭博士！僕にデスゼットさんをください！

……なぜデスコじゃないのかって？

そんなのデスコはあのメンバーに囲まれてこそ幸せだからに決まつ  
てるじゃないか！

## 第7話（前書き）

やつベエストックが切れそうだ……

## 第7話

プリニー 殲滅部隊 + ハヴァルバトーゼを倒すため、地獄の中を進んでいく。

地獄は深部へ向かえば向かうほど凶悪な犯罪者が捕らえられており、虎視眈々と牢から出ることを考えている。

「なあ、僕は無実なんだよ・・・・・だから出してくれよお  
「私を出してくれればイイコトしてア・ゲ・ル」  
「俺を出せ!! 出さねえと殺すゾ!!」  
「ウルサイわね!! アンタたち犯罪者なんだからしつかり罪償いな  
さいよ!!」

囚人達の願いをバツサリ切つたフーカに、ギヨロッと視線が集中する。

そこから始まる盛大な罵り合い。

身体が大きくて見た目もヤバい悪魔と、口を開かなければ美少女のフーカの口論は非常に低レベルであり、飛び交っている罵声も「バカ」だの「アホ」だと、まるで小学生の口喧嘩の様だ。

「ほお・・・・・意外と度胸座つてんな、あの小娘」  
「お、おい、止めなくていいのかよ!!?」  
「アイツらは牢獄の中だし、問題ないだろ?」  
でもまあ、ここで時間潰すのもどうかと思つて、止めるかねえ  
(なんか変なもんも見えたしな)「

そつ言つとアグニは囚人とフーカの間に立ち、手を広げた。  
当事者の一人は予期せぬ乱入者に口が止まってしまったようだ。

「……」

「こちらにしておいてくんね？」

「こっちには用事があるんだよ」

「あ…………そうだった。」

こんなやつに構つてゐる暇なんてなかつたわねー！」

「そんなもん関係あるかー！」

そのメス餓鬼は俺達に生意氣言つたんだ！

詫びの一つでもいれさせりやー！」

「ぬあんですつてえー！」

「ああ、いいから！」

お前もうあつち行つてろーー！」

「ちよー!? 押すんじゃないわよー！」

怒りから前に出ようとしたフーカを抑え、半回転させると背中をグツと押す。

するとフーカはたたらを踏んで一度こちらを睨むと、渋々エミーリーザル達の元へ戻つていった。

しかしそれに納得のいかない囚人は怒りの矛先をアグニへと向ける。

「何勝手な事してんだよーー！」

もうちよつとだつたつてのによお…………」

「確かにもうちよつと近づけば、その手に持つてゐたナイフがあの小娘に届いていたな」

その言葉を聞いた囚人はまるで時が止まつたかのように、動きを止めた。

そして今まで浮かべていた怒りの表情を消し、何も感じさせない無の表情へと変化させる。

「…………氣付いてたのか？」

「たまたま…………な。

それに深部に繋がれている悪魔があんな低レベルな口論するのもおかしいと思って、お前の事観察してたんだよ。  
そしたらお前の片手から光が見えてな」

囚人はその手に握っていた食事用ナイフを地面に放る。  
どうやらフーカに見えないよう逆手で握っていたようだ。

「ふう…………で、お前は俺のことを看守にでも話すのか？」  
「いや？ 僕はそんな告げ口みたいなこと好きじゃねえもんでな  
「じゃあ何が目的だ？ 別にあのメス餓鬼の部下つてワケじゃない  
んだろう？」

「なんで止めた？」

「一応一時的には言え、仲間だからかねえ…………たぶん」  
「曖昧だな…………まあバレちまつた時点で諦めはするけどよ。  
それにしても残念だな」

「なんで殺そうとしたんだ？」

「別に腹が立つたとかじゃないんだろ？？」

「そんなもん簡単な理由だ…………殺したかったからだ！  
死ぬ顔が見たかった。 苦しむ顔が見たかった。

怖がる顔が見たかった。痛がる顔が見たかった。

それだけじゃ殺す理由にならねえかい？」

「…………いや、立派な理由だ。

それじゃゆづくりと刑期が終わるまで休んでてくれ」

「ヒヤハツ・・・・・・ヒヤハハツ・・・・・ヒヤアアツハツハツハツハツ！」

背を向けて歩き始めたアグニの後ろでは殺人狂の悪魔が永遠と笑い続けていた。

幸いエミーゼル達は既に先へと歩を進めていたために、その異常な悪魔を見る事はなかつたが、これから先の囚人たちも狂氣と残酷さに溢れた極悪人の巣窟。

これから先まだ精神的に幼いエミーゼルが歪まないかどうか若干の心配をしながら、アグニは急ぎ彼らの後を追う。

しばらく走り続けると、立ち止まって何やら話し合ひをしているフーカ達を見つけた。

「何やつてんだ？」

「ああ、アンタやつと来たの？」

今エミーゼルって子に何が出来るか聞いてたところなのよ。でもちようぢ聞き終わつたところだから、次はアンタの番！でアンタは何ができるの？」

「俺か・・・・・・俺は戦闘に向いてないぞ？」

「いいから何が出来るか言いなさいって！」

「あえて言つなら・・・・・・魔法と剣を少々つてどこいか？」

「なんだ、結構戦えそうじやない」

「少々つて言つてんだろ・・・・・・話聞いてたか小娘？」

「とりあえず俺にあんま戦力としての期待はすんな。

援護ぐらいは出来ツけど、あんま火力ねえからな

「いいわよ？ 実際アタシだけでもどうにかなるんだから、それをアシストしてくれればそれだけでいいわ」

自信満々にそう言いきるとフーカはアグーに背を向け、足を進め始めた。

しかし数歩も歩かないうちに立ち止まり、振り返る。

「そりそり、最初は宣戦布告するだけだからアタシとアタシの部下だけでいいわ。

アンタたちはここで待つて

「宣戦布告う？」

なんでそんな面倒くさいことするんだ？」

「だつていきなり奇襲だなんて悪役のする事じやない。

アタシはこの夢の主人公なんだから正々堂々と叩き潰してやるわよ

！」

「「夢？」

「じゃあ行つてくるわ！」

フーカの発言に疑問を感じた一人を置いて当の本人は足早と去ってしまった。

残されたブリニー殲滅部隊の面々も呆れ顔である。

とりあえず疑問を解消するために近くにいる隊員を捕まえ、話を聞くことにした二人。

「さつきアイツ夢の主人公がどうのとか言つてたけど、どういう意

味なんだ？」

「隊長は・・・・自分が死んだことを認められず、この世界の事を夢だと思い込んでいるんです」

「はあ？」

「何かに襲われたのは覚えているようなのですが、そこで気絶して夢を見ていると思い込んで・・・・」

「さうか・・・・お前達も大変だな」

その言葉に対して返ってきた返事は、言葉ではなく長いため息だけだった。

## 第7話（後書き）

プリニーもレベルが高ければそれなりのステータスになるので、あんまり馬鹿に出来ない……そしてプリニーガーXというプリニー亞種みたいのは最強の種族だしｗ

一度食らつた攻撃はダメージが0になるっていうスキルはマジ鬼畜あれ仲間になつたらチードだなあ……ならぬいけどｗ

## 第8話（前書き）

FF13 - 2 発売日

一週間後に学力試験

… いえーい

しばらくして部下を引き連れたフーカが胸を張つて戻ってきた。  
ビリヤー無事宣戦布告を終えたようだ。

「今戻ったわよ！

アンタたちにもアタシのカツコイイといひ見せてやりたかった位なんだから…」

「へ～そうですか……で、戦うのは何時だ？」

「明日の朝、腐界ヶ原つてところで…」

「ハア！？」

「何よ？ なんか問題ある？」

「イヤイヤ、あるに決まってるだろ！…  
準備とかしないのかよ！？」

「テメエ、アイツらのこと舐めてねえか？」

「準備なんて要らないわよ？

だってアタシにはコレがあるもの！」

そう言つて手に持つたエスカリボル・…・・・釘バットをホームラン予告のように突き出す。

何故かただの釘バットのはずなのに、所々にある血痕が禍々しい。  
呪いの武器と言われても信じてしまいそうである。  
だがソレとコレとは話が別。

「いや、お前はそれでいいのかも知れないけど他のヤツはどうすん  
だ？」

「大丈夫でしょ？ 戦争は数よ！！

あつちはプリニーと偉そうな男一人だけなんだから、こつちに負ける理由なんて無いんだから！」

「オレ様の話聞いてたか？」

「つて言つた小娘・・・・お前まさか決闘じゃなく、戦争の宣戦布告してきたのか？」

「そうよ？」

「な！？ 周りのヤツらは止めなかつたのか？  
お前ら悪魔だろ！」

「な、何怒つてんのよ！？」

戦争も決闘も戦うのに変わりないじゃない！」

「小娘・・・・それは人間の理論だ。

悪魔にとつて戦争は無駄の多い唾棄すべきこと。

悪魔の戦う理由は暴と暴を競い合うことこそ戦いの醍醐味なんだ。テメエのやつたことは相手の感情を逆撫でしたただけだ」

「何よ、アイツらが怒つてたつて関係ないじゃない！」

怒つてるからつて強くなるわけじゃないでしょ！？」

「・・・・戦い舐めてンだろ？」

感情が戦闘力に関係ないわけねえだろうが！

アイツらは悪魔であることに誇りを持つてんだ。

魔界に人間界の悪影響を与えたために気合い入れてくるに決まつてんじやねえか！

(アイツらが油断してたら、まだ万が一があったつづのに……  
・・色々準備しとくかねえ)」

「・・・・・いいじゃない、上等よ!」

アイツらが強くなるんならそれ以上の力でねじ伏せてやるわ!  
それにアンタ達こそアタシのこと舐めんじゃないわよ!」

アタシはこの夢の主人公、風祭フーカなんだから!…」

まるで拗ねたように何処かに歩き去ってしまったフーカ。

エミーゼルは未だにプリニー殲滅部隊の隊員達に説教している様だ。  
しかしアグニは今この場にいないうー力のことで、隊員達に聞きた  
いことが出来た。

故にエミーゼルの説教を強制的に止める・・・・・デコペーンで。

「痛ツ!?  
いきなり何するんだよ!」

「コイツらに説教したってしうがねえだろ?が。

あの小娘には俺の方から一応言つといったから、そこら辺にじとじた

「だつてコイツらが止めてれば!」

「立場が上だつたから意見言えなかつたんだろ?

それにもう過ぎたことだ、次が無けりや問題ない。

それ以上に俺は聞きてえことがあんだが・・・・・・

とりあえず一番近くの隊員の肩を掴んで、質問する。  
先ほどまで説教されてたからか、少し身構えているようだ。

「そんな緊張すんな、ちょっとした質問だつづの」

「な、なんでじょうつか?」

「いやな、あの小娘……風祭フーカとか言ったか？」

「アイツは強いのか？」

「…………ええ、力だけは確かです。

今ここにいる隊員は全員一度の方に倒されてますから

「へえ…………アイツそんなに強かつたのか。

まあオレ様ほどじやないだらうけどな！」

「そうかもな…………（訓練の時の力が万全に出せねばの話だけどな）」

「あの…………そろそろあの方を追いかけたいのですが」「ん？ ああ、別にいいぞ？」

「情報ありがとな」

「いえ、じゃあみんな行くぞ！」

「――「オーッ！――」「――」

数人の隊員がフーカの去った方向に向かつて走り始める。  
どうやら多くはないが慕ってくれている部下は何人か居るようだ。  
バカな子ほど可愛いと言つので、何とも言えないが。

「ブリニーのなり損ないでも部下に慕われてるんだな…………  
それに比べてボクは…………」

「まあ、しようがねえ部分もあんじやねえか?  
やっぱ大統領の息子つつう印象が強いからな。

ハードルが高くなっちまつてんだよ」

「そつか…………でも、何時かは流石大統領の息子つて言われ  
る立派な悪魔になつて見せる！  
そのためには、まずこの任務を成功させなきや！」

「お前も手伝ってくれよ？」

「お前自身の力でやんなきや 意味ねえんだろうけど、まあ…………

・少しきら一なら手伝つてやるよ

「ありがとう！」

手伝つと言つても方法は色々ある。

危機に陥つたときに戦略的撤退をさせるのも一つの手伝い。

アグニは少しだけ後ろめたさを感じながらも笑顔のエミー・ゼルに苦

笑を返した。

明日の戦い、勝てる確率は決して高くない。

決戦の日、アグニとエミーゼルが決戦の場となる腐界ヶ原へと着くと、そこには予定した時間のかなり前だといつにもかかわらず、フー力達の姿が見える。

どうやらかなり気合いが入つていいようだ。

アグニが少しだけ感心していると、フー力達がこっちに気付いた。

「アンタたち、遅かつたじゃない！」

「いや、まだ予定よりかなり早いぞ？」

お前達どれだけ早く来ていたんだ？」

「アタシ？ アタシは遅刻しないために昨日の夜からいたわ！」

「ハア！？ バツカじやねえの！？」

「何よ、別にアンタに迷惑掛けたわけじゃないんだからいいじゃない！」

エミーゼルとフー力は楽しそうにしているのでとりあえず放つて置いて、アグニは愛用の仕込み杖を手にイメージトレーニングを始める。

自身の力を出来るだけ隠しつつ、援護を行わなければならぬ。

もしここでアグニが強いと知られてしまうと、今後少し動きにくくなる上にエミーゼルがアグニを頼ってしまうかも知れないからだ。短い間とは言え先生役を行つていた身として、出来れば心身ともに強い悪魔になつて欲しいと思うのが親心ならぬ先生心。

彼には自分の意志を強く持ち、他者の力が無くとも目の前の壁を破壊できるようになつて欲しい。

それにこの作戦が失敗してもエミーゼルにとってはいい経験になる

だろう。

挫折を知らない者は增長しやすく、油断は容易く死に繋がる。  
もしここで完膚無きまでに負けたとしても、それを進化の礎と出来  
れば何の問題もない。

アグニは彼を殺させるつもりなど無いのだから。

ちなみに端から見て杖を抱えて田を瞑つてているのだが、この杖が仕  
込み杖であることは今ここにいる誰も知らない。

故に剣を使うと聞いていたフーカとユミーベルはそこが気になつた。

「あれ？ アンタって剣も使うんじゃなかつたの？」

「見えないところに剣を隠してるのでケジヤなさそうだよなあ」

「そうよねえ・・・・・アンタの剣ってどこにあんの？」

いつの間にか結構仲良くなつていた二人が瞑想しているアグニに問  
いかける。

するとアグニは一端イメトレを中断してゆつくりと田を開く。

「剣ならここにあんただろ？が

「何処にあるつて言うのよ！」

何、まさかバカには見えない剣とでも言つつもり！？

「そんな剣あつたらバカを斬りたい放題だな・・・・・・

「違えよ、コレだコレ」

「コレって・・・・・杖じやない。

やつぱりバカにしてんでしょう！」

「だからちげえって、仕込み杖だつづの」

「仕込み杖ってなに（よ）？」

「そこからかよ・・・・・まあ、見た方がはええな

そう言つとアグニは杖の持ち手の部分を引っ張る。するとスッとした音もなく杖の中から鋭い刀身が現れた。

「カツコイイ————！」

「コレ頂戴！」

「バカなこと言つてんじゃねえよ、これは俺の愛剣だぜ？ どれだけ苦楽共にしてきたと思ってやがんだよ」

「なあアグニ、剣が杖に入つてるのは分かるんだけど、この杖つて魔法も使えるのか？」

「当たりめえだろうが、これ結構値打ちもんなんだぜ？」

「へえ・・・・・つてアレ？ 愛剣ならなんで今まで訓練の時は抜かなかつたんだ？」

アグニは過去に何度もエミーゼルに実戦形式の訓練を着けている。その際彼が使つていたのは「ごく普通の杖。

訓練でエミーゼルは彼に勝てなかつたので特に疑問を覚えなかつたが、剣を使えると聞いたとき内心結構驚いていた。

「剣は加減が効きにくいからな。

魔法なら自分の制御次第でどうにでも出来るから訓練に向いてんだよ」

「アレでか・・・・・？」

「アレって、そんなに強かつたの？」

「強かつたって言つたか、エグかつたって言つたか」

エミーゼルの話を聞くと、大きな火球の影に大量の小さな火球を仕込んだり、火球に火球をぶつけて速度を上げたりしてきたようだ。実戦経験があれば別なのだろうが、エミーゼルには少し厳しい内容だったのだろう。

しかしそれで彼の実力が上がったのも事実。

魔法はただ放つのではなく、それをどう使うかで魔法使いの強さは決まる。

形式に捕らわれない魔法は実戦で必ず役に立つ。

それをエミーゼル自身も分かっているからこそ、内心では結構感謝していた。

「ってなんだ、アンタ少しつて言つてたのに結構強いんじやない！」「いやいや、ちょっと狡いだけだぞ？

火球の温度も高くなかったしな

「ああ、確かに当たつてもそこまで大きな怪我はしなかつたなあ」「なんだ、でもまあ予想以上に援護に期待出来そうね！」

フーカはそう言つとアグニにワインクレ、釘バットの素振りを始めた。

どうやら聞きたいことを聞き終えて満足したらしい。

「それにしても早く来すぎたんじゃないかな？」

「後一時間以上あるぞ？」

「まあまあ、別にやることがあったわけでもないし、いいじゃないか

「まあな、それにしてもお前今度は勝てそうなのか？」

前回は結構一方的に負けたんだろう？」

「今回は大丈夫だ！ 今度は一瞬たりとも気を抜かないし、魔法を

過信しない！」

「…………それならいいけどな」

決戦まで後一時間。

激しい戦いの幕がもうすぐ開ける。

## 第10話（前書き）

クリスマス？ なにそれおいしいの？

## 第10話

約束の時刻まであと少しといったところで、遠くからヴァルバトーゼ達がやってくるのが見えた。

その姿には一片の気負いも無い様だが、何故か動搖している。

ブリニー殲滅部隊は前口上を行つたためフーカを一番前にして陣形を取り、エミーゼル達はその若干後ろに位置取っていた。

「何故俺達よりも早くここに面る！？」

コレではまるで遅刻したようではないか！」

「フフン 当たり前よ、なんてつたつて昨日からここに居たんだから！」

胸を張つているよつだが残念ながら感心する者はない。

前日から居ることが必要な場合は場所の事前調査か、汚い手を使うのならば罠を用意するためだつ。

フェンリッヒは念のため周囲を何気なく観察し罠の存在を確認するが、特に仕掛けられている様子は無いよつだ。そのことを自身の主に報告しようと振り返る。すると・・・・・。

「なん・・・・・・だと？」

「昨日のからとは、やるではないか！」

「閣下・・・・・・お願いですか、アホと同レベルのどこので争うのは止めてください」

「アホってなによー 遅刻しないために早く来たんだからこじゅ

ない！」

「黙れ小娘！ 閣下に敵対する女などアホで十分だ！！」

「ムキヤ——————！ もう怒つたんだから！

アンタたちなんかプリニーと一緒に殲滅してやるんだからね！  
せ・ん・め・つ！」

「そう言えばまだ聞いてなかつたな、お前は何故プリニーを消そつ  
とする？」

お前も人間の魂ならば同胞のようなものではないか

「どうほづ・・・・・・・・ドウホウ？」

「仲間つてことだ・・・・・・・アホが」

「な、何よー？ しょうがないじやない！

中学校じゃ習つてないのよ！

それにはプリニーと仲間ですつて？

バカなこと言わないで！！

アタシが、アタシ達がプリニーの所為でどんな目に遭つたか知らな  
いからそんなことが言えるのよー！

アタシの夢なんだからハッピーハンデしか要らないの！  
だからこんな悪夢を早く終わらせるためにも、アンタ達はここで退  
場してもらつわー！」

自陣の武器釘バットを構え、臨戦態勢に入るフーカ。  
しかし二人で待つたを掛ける者が一人。

「おいおいおい！ オレ様を忘れてるんじゃないかー？

「あ・・・・・・『メン』『メン』、忘れてた」

「なんだ小僧、また来たのか？」

「当たり前だ！ お前達を倒すまでは諦めないと！」

「何度も掛かってきても同じだ。」

貴様じや閣下には勝てない。

前回も閣下に怪我ひとつさせることも出来なかつただうづが。  
まあオレが居る限り閣下に指一本触れさせるつもりはないがな

「

そう言つてフェンリッヒは、なにも言わないアグニを見る。  
前の戦闘が終わらせすれば、エミーゼルとアグニは撤退すると思つていたフェンリッヒからすると、現在の状況は若干の予想外なのである。

閣下と自分が居れば負けることは無いと思つてはいるが、閣下が言う命奪の森の主の存在が気になる。

それにアグニ本人の実力も目にしたわけではない。  
明らかに情報が足りていないので。

部下のプリニーに情報収集をさせてはいるものの、如何せん集まる情報は眉唾物ばかり。

曰く孤軍は不死である、曰く異世界の魔王と交流がある、曰く過去に国ひとつを瞬く間に攻め滅ぼした等色々だ。

そして孤軍アグニスの情報について回る21人の悪魔で構成される近衛隊。

積極的に暴を示していたわけではないが、その強さは上級悪魔の中でも群を抜いていたと言われている。

特に有名だったのは夜魔族の最上級種。

その者は本来火の中級魔法までしか覚えられないハズの夜魔族にもかかわらず、火・氷・風・星の最上級魔法を全て覚えているという異常な悪魔。

最近見かけたという情報は無いが、何処かで孤軍の再起を待つているらしいとの噂は絶えない。

なんにせよ警戒して損はない。

暴君時代の閣下ならまだしも今の閣下には魔力が無く、全盛期とはほど遠くなっているのだから。

そんな絶賛警戒中のフンリッヒの言葉に反応したのは、予想外にもフーカだつた。

「え、何？ 接戦だつたんじゃないの？」

「アホが、こんな小僧に閣下が苦戦するはずがないだろ！」

「ウソ・・・・だつて、大統領の息子つて強いんじゃないの！」

？」

信じたくない気持ちを抑えつつ、フーカは確認のためにHミーゼルの方へと振り返る。

しかしそこにはフーカが望んでいた否定的な表情はなく、苦虫を噛んだような顔があつた。

流石にその表情を見るとこれ以上責めるわけにも行かず、再び顔を戻す。

「べ、別にいいわよ！ どうせアンタたちなんて私達だけでも余裕よー！」

「アンタたちを倒して、プリニーの皮を一枚残らず剥ぎ取つてやるんだから！」

「他者の物を無理矢理奪おうとするその浅ましい思想。

もはや貴様の悪意は悪魔すら越えているかもしけんな」

「はい、誇りがない分悪魔よりも外道と言えるでしょ！」

「そうだな、ならばプリニー教育係として教育すべきだろ！・・・

・・恐怖もつてな！」

「言いたい放題言つてくれりゃつて！

もう絶対許してやんないんだから！」

「お、オレ様も今度こそお前達に負けないんだからな！」

両方が戦闘態勢に入り、一触即発の空気になった。  
小さなきつかけで戦いの火蓋は切られることだろう。  
そんな中今まで一言も喋らなかつたアグーも静かに準備を行う。  
そう、いつ何が起きても対応出来る様に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2014y/>

---

フォーカード？ いや、革命だ！

2011年12月25日18時51分発行